
〔幼馴染三人組+ONE〕 × 純愛

茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〔幼馴染三人組＋ONE〕×純愛

【Nコード】

N1633Y

【作者名】

茜

【あらすじ】

幼馴染三人が高校生活で!?

第一話

★陸

オレは、固まっていた。今日発売のどうしても買いたいジャ○プを買うのに、あと十円足りない：これだけを楽しみに一週間がんばったのに！

なんで、オレ！

どうして！

あと、十円持ってこなかったんだろ

「あと、十円：ああ！」

知らず知らずにそんなつぶやきがもれる

「あの：よかったらこれ」

振り返るとそこには救世主が立っていた――十円玉を持って

「ありがとうございます！このご恩絶対に忘れません！」

冷静になってみるとずいぶんとかわいい。小柄で黒髪ロングで顔がくりっとしてるとこんなかドストライク！名前！きいとう

「オレ、吉川陸っていいいます。名前！教えてください！」

「桐谷美希よ。じゃあね」

そうして彼女は去って行った

ジャンプも買えたことだし、悠馬の新しい部屋で読もうかな：あつ、悠馬っていうのはオレの幼馴染で黒田悠馬。とんでもなく頭がよくて男のオレからみてもかっこいい。悠馬みたいになりたかったなー俺は顔がおんなっぽいなだね、一応ギリ170あるけど悠馬はさらに5センチ高いし。その悠馬が高校生になるこの春、一人暮らしをはじめたーあ、ついた

カギが開いてたから勝手に入る

「あれ？陸？」

声がかけられた、陸の声じゃない：若菜だ。

山本 若菜も幼馴染で、俺と悠馬と同じ学校に入学する

「陸？なにしにきたんだ？」

気のせいじゃなく、悠馬の声が怖い。

「いや、なんとなく寄ってみただけ」

「女のところにいけばいいじゃん、あ、美奈と切れたんだっけ？」

「ちげえよ、悠馬。美奈とは最初から切れてるよ、遊んでただけ」

「聞いた？悠馬。こいつ何気にサイテーなこと言ってるんだけど」

若菜が言う。だってしょうがないじゃん！遊びでいいとか言われ
たら、遊ぶしかないだろ？ちょうど受験終わってたし。

「明日！遊びに行こうよ」

若菜が提案しつつ、悠馬を見た。それでオレは大体察しがついた。

「いいけど、どこ？」

まあ、頭のイイやつはわかんないかもな…まだ入学前なのに配ら
れた課題の多さに！

「「図書館」」

オレも便乗しとく

「図書館ってーああ、課題か。でもあれ、テストのための課題だ
ろ？やらなくていいのか？」

え？そうなの？まあ、説明のとき寝てたから

「悠馬！ヤマ当てて！」

「わかったよ、明日10時に図書館な」

でも悠馬の勉強の教え方怖いんだよな、スパルタで…

第二話

★若菜

今日は高校の入学式♪幼馴染の悠馬と陸も同じクラス！悠馬はなんと新入生代表でスピーチとかやってるー今！

「ーたいと思います。以上、新入生代表一年C組黒田悠馬。」
相変わらずの整った顔でしめくくった。悠馬の黒髪は威圧感あるし結構近寄りがたいのに、こんな、女の子の視線あつめちゃって、本人きづいてるのかな？ついでに隣にも視線集める馬鹿がいます。私が山本若菜で吉川陸だから出席番号隣なんだよね。陸は悠馬とは正反对でめっちゃかるい。ほんと、たして二で割ればちょうどいいと思う。陸が馬鹿すぎるから。

「陸が馬鹿すぎるから。」

「何かいったかな？若菜チャン。」

ヤバ。声に出てた。相手は陸だ！笑ってごまかそう！

「なんでもないよ？」

「いったよね。よからぬことを」

「……。」

「おいっおまえら」

「悠馬!？」

「移動。次、教室。遅すぎ。」

まわりをみるとほとんどの人が移動していた…

教室には担任の山田という先生がいた。みんな、割とまじめに先生の自己紹介を聞いている。

あっ、悠馬と桐谷美希ちゃんっていう小柄で黒髪のりすっぽい女の子が学級委員になってる。かわいーなとか思ってたら休み時間になってた

「桐谷さん、幼馴染の若菜と陸だよ」

悠馬が紹介してる

「美希ちゃん？よろしくね、って、陸どうしたの？」
驚いたように固まってた陸は

「こないだは、ありがとう！十円返すね」
十円？

「どういたしまして。美希でいいよ」

陸が笑う。近年、例を見ないくらいの超笑顔

「陸。忘れてるかもだけど、次テストだからな？」

陸の笑顔が消えていく：悠馬のスパルタ指導を思い出したんだろ
うな

「若菜、二次方程式の解の公式は？」

「え？…えーとYにえーぶんの…なんだっけ？」

「 $y = \frac{-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac}}{2a}$ よ」

「すごい！美希ちゃん頭いい」

「若菜もがんばってね」

第三話

★若菜

「おはよう！」

「おはよー」

朝、教室に入ってきた陸と悠馬にあいさつする。

「おはよう。」

出席番号順で陸は私の後ろで悠馬は私の隣の席だ。

「悠馬ー、今日の数学の宿題みせてー」

「オレも！」

「いいけど、入学三日目で宿題やってこないってどうなの」
少し笑って、悠馬が言う

「だって、高校の数学難しいんだもん」

ふざけてみる、もう、開き直るしかないでしょ。

なんとか、午前の授業が終わってお昼になる

「美希ちゃん、一緒に食べよう♪」

実は昨日も美希ちゃんと食べたんだよね

「オレらも一緒にいい？」

「陸！悠馬！いいよー」

「若菜、さっきー危な」

「！」

目の前で水が降ってくる。……あれ、冷たくない？

「大丈夫？」

ふりかえった二人がびしょびしょになっている。通りすがりの男
子がバケツをひっくりがえしたらしい。

「おい、お前。女の子にみずかけんなよ」

「若菜、少しぬれてるからふいて」

その後の授業は、ほとんど頭に入ってこなかった。
……だって、二人とも、ずっと幼馴染だったのに
男だって意識したことなんてなかったのに
どうして？

陸のことすきになっちゃったのかな
ほんと、どうしよ

第四話

★悠馬

「ゴホっ。ゴホっ…だる…」

朝起きたら、体調が…ヤバイ。てか、マジで起きあがれない。昨日、水かぶったせいだろうな。時計：4月11日7時37分土曜日。学校、休まないと…。

なんとか携帯から学校に連絡を入れた。…もう無理…電話の機械音で頭痛がひどくなる…意識が飛んだ

起きたら13時過ぎで少し楽になった。

『ピンポン』

「…はい」

「悠馬？だいじょうぶ？」

「若菜？ちょっと待て、うつるから。入ってこな—」

足元がふらつく…。

「ちよつと、だいじょうぶ！？さつさとベット、はいつて。体温計どこ？」

「その棚の中…」

そんなこと、どうでもいいから…はやく帰ってほしい…移したくないんだよ

「はい、測って。お昼は？食べた？」

「食べてない…けど食欲ないから」

「すこしでも食べないと—何度だった？」

「39.2度」

「—救急車！」

「呼ばなくていいから…代わりに…陸呼んでくれる？…んで、お前は帰って。うつっちゃうから」

「陸はいいの？」

「…馬鹿は風邪ひかないから」

「あはは、そうだね。わかった」

なんとか若菜を追い返す…若菜来てから熱上がったきがする…まあ、次来るの陸だし…

「――ゆうま、悠馬！」

「…ん…ゴホっ、ゴホッ、コホ…陸」

起き上がると寒気がした

「大丈夫か？つらそうだったけど…ここ、薬とか何もないな」

「引越したばかりだから」

「解熱剤とか持ってきていたから。」

「ありがとう。でもなんかむかつく…馬鹿は風邪をひかないってほんとうだったんだな」

「お前が若菜にかまってばっかっで、濡れたままだったからだろ。でも、よかったな」

「コホッ…なにが？」

「若菜、俺らのこと意識したみたいじゃん、お前の十年越しの片思いもむくわれるかもな」

「…気づいてないのか？」

「なにかいったか？」

若菜が好きになったのはお前だよ、陸。

「なんでも。今、何時？」

「18時」

「…バイト、いかないと…」

「無理だろ」

「生活かかってんだよ、明日休みだし」

言いながら、立ち上がる。解熱剤を飲んで着替える

「じゃあ、俺いくから…陸、色々ありがとな」

「ちょっと待て！むりだろ！――」

なんか陸がいろいろ言ってるけど、合鍵渡してるし勝手に帰るだろ

第五話

★若菜

「若菜、悠馬を見てきたよ。なんかバイト行っちゃたけど」

美希と陸とファミレスで待ち合わせをした：悠馬が休んだからノ
ート見せてもらえなかったたので美希のを見せてもらうために。

「そうなの？だいじょうぶかな？」

昼間、あんなだったのに

「心配なら、見に行ったら？なあ」

そう言っ陸が美希に笑う

そこで、気づいてしまった。陸が美希を見ていることに。友達以
上に熱くて、少し切なそうな目で。

：その目の意味にも。

「ううん、いかないよ悠馬なら大丈夫だろうし」

それに：心の中で付け加える――今は、陸と美希を二人にしたく
ない。

ずるいかもだけど：

そのあと、私はどんな話をしたかもわからないまま家に帰った

第六話

★若菜

「また、勝った。13連勝」

「どうしてかてないんだろ？コツとかあるの？」

現在、悠馬とダーツの勝負中。これが何回やっても勝てなくてすごい悔しい

月曜日、悠馬は治ったといって学校にきた。少し、声がかすれるけど。テニス部の練習を見に行ってる陸を悠馬と教室で待っているけどすこし飽きてきた

「若菜は部活、どうするの？」

「バスケ、やってみたいかも」

「若菜は足速いし、背も164あるからうまくなるかもな」

「悠馬は？」

「帰宅部。バイト忙しいし」

もったいないな。悠馬は中学の時バスケやっててすごい上手かったから

「もったいない、とか思った？」

「！」

「わかるよ、若菜のことなんて」

少し笑って悠馬がいう

「私、わかりやすいかな？」

「幼馴染歴、長いからな。」

これは絶対、気持ちばれてる気がする

「悠馬…私…陸のこと好きになった」

「そう」

「ばれてた？」

「ばればれ。でも、陸は鈍いからきづいてないよ」

「ほんと？…陸、美希ちゃんのこと…すきだよ」

「若菜」

「でも、ちゃんと消すから。陸に気持ち伝えて幼馴染に戻るから。伝えないと」

——ふいに、悠馬の唇がふってくる。

「すきだよ、若菜。ずっとすきだった」

驚くを通り過ぎて冷静になると、どうして今告白してくれたかわかった

「大丈夫。答えはわかってるから。玉碎してもしないよ」

悠馬の優しさに泣きそうになる

「ごめんね…ありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1633y/>

〔幼馴染三人組+ONE〕×純愛

2011年11月16日19時52分発行